

王羲之の「蘭亭序」について

【キーワード】晋朝、王羲之、蘭亭の会、蘭亭序、書翰

はじめに

王羲之（三〇三～三六一）の生涯は、およそ、

- (1) 会稽内史になるまで
- (2) 会稽内史の時期
- (3) 会稽の逸民

の三つの時期に分けることができる。（注①）

(1) 「会稽内史になるまで」の王羲之は、二十歳（三二三）の頃に秘書郎として起家し、三十二歳（三三四）の時に征西將軍庾亮の参軍となり、その後、長史に遷った。三十七歳（三三九）の時に、丞相王導（羲之の父曠の従兄弟）が卒し、その後を追うように郗鑒（羲之の妻の父）も亡くなり、翌年の正月には庾亮も世を去っている。この三人は時の大臣であり、羲之とは非常に深い関係にあった人達である。

三十八歳の時に、羲之は寧遠將軍・江州刺史に遷り、任期を終え

佐藤利行・劉金鵬

て帰京しての後は、侍中や吏部尚書に召されたが、辞退してその任に就くことはなかった。

その後、四十六歳（三四八）の時に、友人であり、時に揚州刺史であった殷浩の薦めもあって、護軍將軍として中央政府に入ることとなった。そうして四十九歳の時に、右軍將軍・会稽内史に任ぜられるのである。

(2) 「会稽内史の時期」の王羲之は、五十四歳で病と称して会稽郡を去るまでの四年間、中央の政情と北方戦線に心を配りながら、会稽郡の政治に携わった。「蘭亭の会」が催されたのは、まさにこの時期である。

(3) 「会稽の逸民」。羲之は永和十一年（三五五）、五十三歳の時に会稽郡を去る。内史として郡の政治に力を尽くしていた羲之ではあったが、意に任せぬことも多くあった。『晋書』本伝に記述されている王述との諍いも、その一つであったと思われる。そうした混乱した政治に関わっていく中で、羲之の心の中では、以前から興味

を抱いていた隠逸への思いが次第につのつていくこととなった。

その後、升平五年(三六一)、五十九歳で世を去るまでの数年間を「会稽の逸民」として過ごすのである。その間の羲之には、もはや出仕する思いも無く、政治と無関係でありたいと願ったであろうが、琅邪の王氏の長老として貴族社会での一族の地位を保持するための苦労は、相当なものであったろうと推測される。

恐らく、この頃(死の少し前)に書かれたと思われる次のような書翰が残されている。(注②)

足下今年、政七十耶。知體氣常佳。此大慶也。想復勲加頤養。

吾年垂耳順。推之人理、得爾以爲厚幸。但恐前路轉欲逼耳。以爾、要欲一遊目汶領。非復常言。足下但當保護以俟此期。勿謂

虛言。得果此緣、一段奇事也。(『淳化』四五一・「三王」上九)

足下は今年、政に七十なる耶。體氣の常に佳なるを知る。此れ大慶なり。復た勲に頤養を加へんことを想ふ。吾は年、耳順に垂んとす。之を人理に推すに、爾を得たるは以て厚幸と爲す。但だ前路の轉た逼らんと欲るを恐るる耳。爾るを以て、一たび汶領に遊目せんと要欲す。復た常言に非ず。足下、但だ當に保護して以て此の期を俟つべし。虚言と謂ふこと勿かれ。此の縁を果たすを得ば、一段の奇事なり。

「あなたは今年、ちょうど七十歳になられるのでしよう。いつもお元気だということなので、とても喜んでおります。どうか更に十分に養生して下さい。わたしも耳順の年になろうとしております。人の世の道理からみて、この年まで生きてこられたのは大変に幸せなことであつたと思います。ただ、行く先が次第に迫っていることが気がかりでなりません。というわけで、是非とも一度、汶領へ遊びに行きたいと思えます。口先だけのことでありません。あなたはお体を大切にして、その時期が来るのを楽しみに待っていて下さい。虚言だと思つてはいけません。この事が果たせたらば、すばらしいことです」とう内容のこの書翰は、益州刺史の周撫に宛てたものと思われる。隠逸の思いを抱き、そうした生活をしたいと願いながらも、なかなかそれを叶えることができなかった、羲之の思いを読み取ることができる書翰である。(注③)

以下、本稿では、永和九年(三五三)、羲之が五十一歳の時に催した蘭亭の会において、そこに参集した文人らが作った詩を集めた蘭亭集に附した「蘭亭の序」を取り上げ、序に込められた羲之の思いを考えてみたいと思う。

「蘭亭の会」

『晋書』王羲之伝には「蘭亭の会」についての次のような記述がある。

義之雅好服食養性、不楽在京師。初渡浙江、便有終焉之志。会稽有佳山水、名士多居之。謝安未仕時、亦居焉。孫綽・李充・許詢・支遁等、皆以文義冠世。並築室東土、与義之同好。嘗与同志、宴集於会稽・山陰之蘭亭。

義之は雅より服飾養性を好みて、京師に在るを樂しまず。初め浙江を渡るに、便ち終焉の志有り。会稽には佳き山水有り、名士は多く之に居む。謝安の未だ仕へざりし時、亦た焉に居む。孫綽・李充・許詢・支遁ら、皆な文義を以て世に冠たり。並びに室を東土に築き、義之と好みを同じくす。嘗て同志と、会稽・山陰の蘭亭に宴集す。

ここに「会稽には佳き山水有り」とあるように、会稽の地は山川の美しい風光明媚なところであった。『世説新語』言語篇には、

王子敬云、「従山陰道上行、山川自相映發、使人応接不暇。若秋冬之際、尤難爲懷。」

王子敬云ふ、「山陰道の上従り行けば、山川自づから相映發し、人をして応接に暇あらざらしむ。秋冬の際の若きは、尤も懷を爲し難し。」

とあるように、義之の息子の王献之は会稽の山川の美しさを賞嘆している。

ところで、この「蘭亭の会」にはどのような人たちが、いったい何人集まったのであろうか。『世説新語』企羨篇の注に引く義之の「臨河の序」には、次のようにある。

故列序時人、録其所述。右將軍司馬太原孫公等二十六人、賦詩如左。前餘姚令会稽謝勝等十五人、不能賦詩、罰酒各三斗。

故に時人を列序し、其の述ぶる所を録す。右將軍の司馬なる太原の孫公ら二十六人、詩を賦すること左の如し。前の餘姚の令なる会稽の謝勝ら十五人、詩を賦すること能はず、罰酒は各おの三斗なり。

すなわち、詩を作ることができた者は二十六人、詩を作ることができず罰として三斗の酒を飲んだ者が十五人、合わせて四十一人が「蘭亭の会」に集まったことになる。集まった人たちについては、宋の張溟の『雲谷雜記』巻一には、以下のように記されている。

予嘗得蘭亭序石刻一卷。首列義之序文。次則諸人之詩、末有孫綽後序。其詩、四言二十二首、五言二十六首、自義之而下、凡四十有二人。

成西篇者十一人。右將軍王羲之、琅邪王友謝安、司徒左西屬謝万、左司馬孫綽、行參軍徐豐之、前餘杭令孫統、前永興令王彬之、王凝之、王肅之、王徽之、陳郡袁嶠之。

成一篇者一十五人。散騎常侍郗曇、行參軍王豐之、前上虞令華茂、潁川庾友、鎮軍司馬虞說、郡功曹魏滂、郡五官謝繹、潁川庾蘊、行參軍曹茂之、徐州西平曹華、滎陽伯偉、王元之、王蘊之、王渙之、前中軍參軍孫嗣。

一十六人詩不成。各罰酒三觥。侍郎謝瑰、鎮国大將軍掾下迪、行參軍事印丘旄、王猷之、行參軍楊模、參軍孔熾、參軍劉密、山陰令虞谷、府功曹勞夷、府主簿后綿、前長岑令華耆、府主簿任凝、前餘杭令謝藤、任城呂系、任城呂本、彭城曹謹。

諸詩及後序、文多不載。姑記作者姓名于此。庶覽者知当世一觴一詠之樂云。

予嘗て蘭亭序の石刻一卷を得たり。首に羲之の序文を列す。次には則ち諸人の詩、末には孫綽の後序有り。其の詩は、四言二十二首、五言二十六首、羲之より而下、凡て四十二人なり。

西篇を成す者は十一人。右將軍王羲之、琅邪王友謝安、司徒左西屬謝万、左司馬孫綽、行參軍徐豐之、前の餘杭令孫統、前の永興令王彬之、王凝之、王肅之、王徽之、陳郡の袁嶠之。

一篇を成す者は一十五人。散騎常侍郗曇、行參軍王豐之、前の上虞令華茂、潁川の庾友、鎮軍司馬虞說、郡の功曹魏滂、郡の五

官謝繹、潁川の庾蘊、行參軍曹茂之、徐州の西平曹華、滎陽の伯偉、王元之、王蘊之、王渙之、前の中軍參軍孫嗣。

一十六人は詩成らず。各おの罰酒は三觥。侍郎謝瑰、鎮国大將軍の掾下迪、行參軍事印丘旄、王猷之、行參軍楊模、參軍孔熾、參軍劉密、山陰令虞谷、府の功曹勞夷、府の主簿后綿、前の長岑令華耆、府の主簿任凝、前の餘杭令謝藤、任城の呂系、任城の呂本、彭城の曹謹。

諸詩及び後序は、文多ければ載せず。姑く作者の姓名を此に記す。覽る者、当世の一觴一詠の楽しみを知るに庶からんと云ふ。

これに拠れば集まった人数が四十一人ではなく、一人多い四十二人となっている。その中には、謝安、謝万、郗曇、孫綽といった当時の名士を中心に、多くの中堅官僚たち、また羲之の子である凝之、肅之、徽之、玄之、渙之、猷之らの名が見えている。

「蘭亭の序」

王羲之の「蘭亭の序」は、蘭亭の会に参集した人たちによって作られた三十七篇四十八首の序文として作られたものである。その内容は、以下の通りである。

永和九年、歳在癸丑。暮春之初、會於會稽山陰之蘭亭。修禊事也。羣賢畢至、少長咸集。此地有崇山峻嶺、茂林修竹。又清

流急湍、映帶左右。引以爲流觴曲水、列坐其次。雖無絲竹管絃之盛、一觴一詠、亦足以暢敘幽情。是日也、天朗氣清、惠風和暢。仰觀宇宙之大、俯察品類之盛。所以遊目騁懷、足以極視聽之娛。信可樂也。夫人之相與俯仰一世、或取諸懷抱、晤言一室之內、或因寄所託、放浪形體之外。雖趨舍萬殊、靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足、不知老之將至。及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣。向之所欣、俛仰之間、以爲陳蹟。猶不能不以之興懷。況脩短隨化、終期於盡。古人云、死生亦大矣。豈不痛哉。每覽昔人興感之由、若合一契。未嘗不臨文嗟悼、不能喻之於懷。固知、一死生爲虛誕、齊彭殤爲妄作。後之視今、亦由今之視昔。悲夫。故列敘時人、錄其所述。雖世殊事異、所以興懷、其致一也。後之覽者、亦將有感於斯文。

永和九年、歲は癸丑に在り。暮春の初め、會稽山陰の蘭亭に會す。禊事を修むるなり。羣賢畢く至り、少長咸な集へり。此の地に崇山峻嶺、茂林修竹有り。又た清流急湍ありて、左右に映帶す。引き以て流觴の曲水と爲し、其の次に列坐す。絲竹管絃の盛無しと雖とも、一觴一詠、亦た以て幽情を暢叙するに足れり。是の日や、天朗かに氣清み、惠風和暢す。仰いで宇宙の大きいなるを觀、俯して品類の盛んなるを察す。目を遊ばしめ懷ひを騁する所以にして、以て視聽の娛しみを極むるに足れり。信に樂しむ可きなり。夫れ人の相ひ與に一世に俯仰するや、或いは諸を懷抱に取りて、一室の内に晤

言し、或いは託する所に寄するに因りて、形體の外に放浪す。趨舍萬殊にして、靜躁同じからずと雖も、其の遇ふ所を欣びて、暫く己に得るに當たりては、快然として自ら足り、老の將に至らんとするを知らず。其の之く所の既に倦み、情の事に隨ひて遷るに及んでは、感慨之に係れり。向の欣ぶ所は、俛仰の間に、以て陳蹟と爲れり。猶ほ之を以て懷ひを興さざる能はず。況んや脩短化に隨ひて、終に盡くるに期するをや。古人云ふ、死生も亦た大なりと。豈に痛まざらん哉。昔人感を興すの由を覽る毎に、一契に合するが若し。未だ嘗て文に臨んで嗟悼せずんばあらざるも、之を懷に喻る能はず。固に知る、死生を一にするは虚誕爲り、彭殤を齊しくするは妄作爲るを。後の今を視るも、亦た由は今の昔を視ることくならん。悲しい夫。故に時人を列敘して、其の述ぶる所を録す。世は殊なり事は異なるも、懷ひを興す所以は、其の致は一なり。後の覽ん者も、亦た將に斯の文に感ずること有らんとす。

「永和九年、癸丑の歲、暮春三月の初めに、會稽山陰の蘭亭に會した。これは禊の祭事をするためである。群賢はことごとく至り、老いも若きもみな集まった。この地には、高い山・峻しい嶺、茂った林・長い竹がある。また、清らかな流れ・たぎる早瀬があり、左右に照り映えている。その流れを引いて、觴を流す曲水となし、人々はそのほとりに列んで坐った。琴や笛の賑やかさはないが、酒を飲み詩を賦して、心中の情いを述べるには十分である。この日は、天

は朗らかに晴れわたり空気は澄みきって、春風がおだやかに吹きわたっていた。仰いでは限らない宇宙の大きさを観、俯しては盛んなる万物を見る。まことに目を遊ばせ懐いを馳せることができ、目や耳を十分に娯^{たの}しませるに足るもので、本当に楽しいことであった。そもそも、人がそれぞれに自分の一生を過ごす場合、心に抱く懐いを、一室の中で語り合うこともあるうし、また、託するものに身をまかせ、形体を超越して過^こすこともある。その生き方は種々様々であり、静と動と同じくはないけれども、それぞれ自分の境遇をよるこび、しばらく自分の思うようになっていく時には、心地好く満足して、老いが我が身に迫ろうとしていることも忘れてしまう。やがてそのしていることに倦^あきがきて、気持ちも事に従って遷^{うつ}ってゆくと、感慨がそれにつれて起こってくる。さきに喜んだことも、すぐに過去のものとなってしまい、とりわけこのことで物思いをおこさずにはいられない。まして、命の長い者も短かい者も、時の移りゆくままに、やがて必ず尽きてしまうからには、なおさらである。古人は言う、「死と生とは、人生の大事である」と。何と痛ましいことではないか。昔の人が感をもよおしたところのものを見るたびに、私も全く同じことを思ったし、古人の文章を前にして、これまで嘆き痛まないことはなかったが、それを心に理解することはできなかった。しかし今や、死と生を同一視するのは虚誕^{てんたん}であり、長寿と夭折を同じとする事が妄作^{わうさく}であることが、よくわかった。後世の人々が今の我々を見るのも、ちょうど今の我々が古の人々を見るの

と同じであろう。悲しいことよ。このようなわけで、ここに列席した人たちの名を書きつらね、彼らの述べた詩を記録することにした。時代は変り、事情は異^{こと}なっても、懐いを興^{おこ}させる種となるものは、結局一つである。従って後世この文を見る人も、また心に感じることがあるにちがいない。」

以上が「蘭亭の序」の全文であるが、この序は内容によって、三つの段落に分けることができる。すなわち、当日の会の様子を述べる第一段、生と死についての羲之の思いを述べる第二段、この会における感懐を後世の人に伝えるために、集まった人々の姓名と作られた詩を記録するということを述べる第三段である。

「蘭亭の序」の中心である第二段において、羲之は「古人云ふ、『死生も亦た大なり』と」と言い、死と生とは人生の大事であり、生きている間こそが全てであり、死後の世界は考えることは出来ないし、考えても仕方がないという自らの思いを述べている。

それでは、この短い生涯を、どのように生きていけば良いのか。羲之は今、その時々を充実して生きる、その連続によって生きている間を充実させることができるかと考えていたようである。この考え方は、いわゆる利那主義的な生き方を用いるのではない。あくまでの今の現実、目の前を充実して生きていこう、というむしろ積極的な生き方であるように思われる。

「目前の楽しみ」

そうした充実した時を連続させるために、羲之は「目前の楽しみ」ということをしばしば言っている。今日まで王羲之の書翰は合わせて七百首近くが残されているが、その中で羲之は「目前の楽しみ」について、以下のように述べている。

古之辭世者、或被髮佯狂、或汚身穢迹。可謂艱矣。今僕坐而獲免、遂其宿心。其爲幸慶、豈非天賜。違天不祥。頃東遊還。修治桑果、今盛敷榮。率諸子、抱孫、遊觀其間。有一味之甘、割而分之、以娛目前。雖植德無殊邈、猶欲教養子孫、以敦厚退讓、戒以輕薄。庶令舉策數馬、彷彿萬石之風。君謂之何如。遇重熙去。當與安石、東遊山海、并行田、盡地利。願養閒暇、衣食之餘、欲與親知、時共歡讌。雖不能興言高詠、銜杯引滿、語田里所行、故以爲撫掌之資。其爲得意、可勝言耶。常依陸賈班嗣楊王孫之處世、甚欲希風數子。老夫志願、盡於此也。君察此。當有二言不。眞所謂賢者志於大、不肖志其小。無緣見君。故悉心而言、以當一面。(「右軍」三二五)

古の世を辭する者は、或いは被髮佯狂し、或いは身を汚し迹を穢す。艱しと謂ふ可し。今、僕は坐ながらにして免るるを獲、其の宿心を遂ぐ。其の幸慶爲るや、豈に天賜に非ずや。天に違へ

ば不祥なり。頃ろ東遊して還る。桑果を修治し、今、盛んに榮を敷く。諸子を率ゐ、孫を抱き、其の間に遊觀す。一味の甘き有らば、割きて之を分ち、以て目前を娛しむ。徳を植つること殊に邈かなること無しと雖も、猶ほ子孫を教養するに、敦厚退讓を以てし、戒むるに輕薄を以てせんと欲す。庶はくは策を擧げて馬を數へ、萬石の風に彷彿たら令めんことを。君、之を謂ふこと何如。遇たま重熙去る。當に安石と、東のかた山海に遊び、并せて田を行なひ、地の利を盡くすべし。願養の閒暇、衣食の餘、親知と時に歡讌を共にせんと欲す。言を興して高詠し、杯を銜んで滿を引くこと能はずと雖も、田里の行なふ所を語るに、故より以て撫掌の資と爲す。其の得意爲ること、勝けて言ふ可けん耶。常に陸賈・班嗣・楊王孫の處世に依り、甚だ風を數子に希はんと欲す。老夫の志願、此に盡くるなり。君、此を察せよ。當た二言有るや不や。眞に所謂、賢者は大を志り、不肖は其の小を志るなり。君に見ふに緣無し。故に心を悉して言ひ、以て一面に當てん。

「古の俗世に別れを告げた者は、髪をふり乱して狂人をよそおったり、わが身やわが行ないを汚したりしました。これはなかなか出来ることはありません。ところが今、私はいながらにして俗世から逃れることができ、かねてからの懐いを遂げました。この慶びは、天からの賜り物ではないでしょうか。天命に逆うことは不吉です。さて、近ごろ東の方を遊覽して帰りま

した。桑の木を植えておいたのが、今やりっぱに育っています。子供たちを引き連れ、孫たちを抱きかかえては、その間をながめまわっております。何かうまいものが有れば、みんなでそれを分けあって、この目前を楽しんでおります。私はとりわけすぐれた徳はありませんが、それでも子や孫たちに敦厚と退讓を教え、輕薄を戒めるようにしております。できますならば、策を手にしていちいち馬を数えたという万石君の家風にならないと願っております。あなたはこのことをどのように思われまするか。たまたま重熙が（西に）行きましたので、安石と東方の山海を遊覽し、ついでに莊園を見てまわり、田をちゃんと作らせるようにしようと思えます。養生のひまができ、生活の余裕ができたならば、親戚の者や知人たちと一緒に欲談したいと思っております。立派な言葉を述べ、高らかに歌いあげ、盃をふくんで飲みほしたりすることはできなくても、田舎でのくらしを語り合えば、手を撫って談笑する種にはなるでしょう。その満ち足りた気持ちは、とても言いつくせないでしょう。いつも陸賈や班嗣・楊王孫の処世術を参考にし、これらの人たちの風にならいたいと望んでおります。老いぼれの私の願いは、ただこれだけです。あなたもお察し下さい。心にもないことは言うてはおりません。本当に、所謂『賢者はその大きなところを知っており、不賢者はその小さなところを知っておる』というものです。あなたにお目にかかるすがありません。それで心

のたけを述べ尽くし、拜眉に代える次第です。」

この書翰は、『晋書』本伝にも、「吏部郎謝万に書を与えて曰く」として載せてある。書翰の中で、「諸子を率ゐ、孫を抱き、其の間に遊觀す」というように、老年を迎えた羲之にとっては、家族と過ごす時間は何より楽しいものであった。特に幼い孫たちは羲之にとつて、かけがえのない存在であった。しかし、そうした幼い孫が世を去ってしまうという悲しい出来事もあった。

官奴小女玉潤、病來十餘日、了不令民知。昨來忽發癩、至今轉篤。又苦頭癰、頭癰以潰、尚不足憂。癩病少有差者、憂之焦心、良不可言。頃者、艱疾未之有。良由民爲家長、不能剋己、修、訓化上下、多犯科誡、以至於此。民惟歸誠待罪而已。此非復常言常辭。想官奴辭以具。不復多白。上負道德、下愧先生。夫復何言。（『二王』上一八）

官奴の小女王玉潤は、病み來たりて十餘日なるに、了く民をして知ら令めず。昨來、忽ち癩を發し、今に至りて轉た篤し。又た頭癰に苦しむも、頭癰は以に潰れ、尚ほ憂ふるに足らず。癩病は少しく差ゆる者有るも、之を憂ひて心を焦ましむること、良に言ふ可からず。頃者、艱疾は未だ之れ有らず。良に民は家長と爲るも、己に剋ちて勲め修め、上下を訓化する能はずして、科誡を犯すこ

と多きに由りて、以て此に至るなり。民は惟だ誠に歸して罪を待つ而已。此れ復た常言常辭に非ず。想ふに官奴辭げて以て具にせん。復た多くは白さず。上は道徳に負き、下は先生に愧づ。夫れ復た何をか言はん。

「官奴の少女の玉潤が、病氣になつてから十数日になりますのに、私には全く知らせがありませんでした。昨日から突然に持病が悪くなり、今はいよいよひどくなつております。その上、頭のできものに苦しんでおりましたが、できものは已につぶれてしまひ、もはや心配するには及びません。持病も少しはよくなつていたのですが、やはり心配で落ち着かず、本当に口では言えぬほどでした。近頃、こんなにもやっかいな病氣は見たことがあります。これもまことに私が家長でありながら、我が身をつつしみ修養して、家族の者たちを訓化することができず、誠めを犯すことが多かつたから、このようなことになつてしまつたのです。私はただただ誠心誠意、罪を待つだけです。これは口先だけで言つてゐるのではありません。官奴がすでに詳しく申し上げていると思ひますので、もう多くは申しません。上は道徳にそむき、下は先生に愧ずるばかりです。もう何も申せません。」

書翰の内容からみて、「官奴」すなわち王猷之の娘の玉潤が治療を受けていた道士の先生に宛てたものであろう。目前を楽しませて

くれるはずの幼い孫娘の死に遭遇して、義之の悲しみはいかばかりであつたろうか。

こうした身内の、それも自分よりも若い者が死んでいくことを経験し、義之はより一層、今この時を充実して生きて行こうという思ひが強くなつていったと想像される。

おわりに

以上、今回は王義之の「蘭亭の序」を取り上げ、そこに込められた義之の思ひを、義之自身がしたためた書翰の内容と重ね合わせるることによつて明らかにしようとした。

ところで、蘭亭の会では主催者である義之自身も以下のような詩を作っている。

其の一

悠悠大象運	悠悠として大象は運り
輪轉無停際	輪轉して停まる際無し
陶化非吾匠	陶化は吾が匠に非ず
去來非吾制	去來も吾が制に非ず
宗統竟安在	宗統は竟た安くにか在る
即順理自泰	即ち理り順ひて自ら泰かなり
有心未能悟	心有りて未だ悟る能はず
適足纏利害	適足せんとするも利害に纏はる

未若任所遇 未だ遇する所に任せて
逍遙良辰會 良辰の會に逍遙するに若かず

この大いなる天地の現象は悠々としてめぐり、ぐるぐると回って停まる時はない。

造り育てたのは私ではないし、往来するのも私がさせているのではない。

いったい誰があやつっているのだろうか、(誰もあやつつてはいないのに) 道理に順つておのずから泰然としている。

俗な心のためにまだ悟ることもできず、満足しようとしているのに利害にからまれている。

境遇にまかせて、この良き時の会いに逍遙するにこすものはない。

其の二

三春啓群品 三春 群品を啓き
寄暢在所因 寄暢 因る所に在り
仰眺望天際 仰眺しては天の際を望み
俯瞰綠水濱 俯しては綠なす水濱を瞰る
寥朗無涯觀 寥朗たり 涯し無き觀
寓目理自陳 目を寓すれば理は自ら陳ぶ
大矣造化功 大いなる矣造化の功

萬殊莫不均 萬殊均しからざるは莫し
群籟雖參差 群籟 參差たりと雖も
適我無非親 我に適ひて親しむに非ざるは無し

この春に万物は目覚め、そのなかで私は存分に気晴しをする。空を仰いで天の際を望み、目を俯せては緑の水辺をみる。

広々として果てしない景觀、目をやれば自然の道理はおのずから明らか。

大いなるかな造物主の功業、万物すべて形は異なるもその理は一つ。

それぞれの響きは様々であるが、私には心地よく全て親しむべきもの。

其の三

猗歎二三子 猗歎 二三子
莫非齊所托 托する所を齊しくするに非らざる莫し
造眞探玄退 眞に造り玄退を探らん
涉世若過客 世を涉ること過客の若し
前世非所期 前世は期する所に非ず
虛室是我宅 虛室は是れ我が宅なり
遠想千載外 遠く千載の外を想ふ
何必謝曩昔 何必 必ずしも曩昔を謝せんや

相與無所與 相ひ與に與る所無し
 形骸自脱落 形骸は自ら脱落す

ああ、君たちよ。身を寄せる所を同じくしない者はいない。
 真実に至り、道の奥義を探ろう。世を渡すことは旅人のような
 ものなのだ。

前世の人の言うことなど私はあてにはしていない。人気の無い
 部屋こそ我が住い。

遠く千載のはてを想いやる。必ずしも昔のことをあれこれ言う
 必要はない。

おたがい、たのみとするものはない。肉体はおのずから無くなっ
 てしまうのだ。

其の四

鑑明去塵垢 鑑明らかなれば塵垢を去り
 止則鄙鄰生 止まれば則ち鄙鄰生ず
 體之周末易 之を體すること周に未だ易からざるも
 三瘍解天形 三瘍を天形と解さん
 方寸無停主 方寸に停主無し
 務伐將自平 伐に務めて將て自ら平かにせん
 雖無絲與竹 絲と竹と無しと雖も
 玄泉有清聲 玄泉に清聲有り

雖無嘯與歌 嘯と歌と無しと雖も
 詠言有餘馨 詠言に餘馨有り
 取樂在一朝 樂しみを取るは一朝に在り
 寄之齊千齡 之に寄せて千齡に齊しくせん

鏡が明らかであれば塵や垢も寄せつけないが、いったん塵や垢
 がついてしまつと曇つてしまうもの。

道を体得することはまだ易しくはないが、若死も天命だと理解
 しよう。

心の中には定まった主はない、わいてくる欲念を伐ち払つて
 平静にしよう。

絲や竹は無いけれども、奥深い泉には清々しい音色がある。
 嘯や歌は無くても、吟詠の声には余韻がただよう。

其の五

合散固有常 合散は固より常有るも
 修短定無始 修短は定めて始め無し
 造新不甞停 造新は甞く停まらず
 一往不再起 一たび往かば再びは起きず
 於今爲神奇 今に於いて神奇と爲すも
 信宿同塵滓 信宿にして塵滓と同にす
 誰能無慷慨 誰か能く慷慨無からん

散之在推理 之を散ずるは理を推すに在り

言立同不朽 言の立つるは不朽に同じきも

河清非所俟 河の清むは俟つ所に非ず

合うと散れるとはもとよりきまりというものがあるが、命の長

短は決して始めからわかっているわけではない。

新しい生命は次々と造り出されるが、いったん死んでしまえば
再び起き上がることはない。

今は神奇なるはたらきをしていても、すぐに塵垢と同じようになっ
てしまう。

誰がいったい悲しみ嘆かずにおれようか、この懐慨を散ずるに
は真理を悟るしかない。

立言によって不朽の名を残すのもよいが、河が清むのを待つて
はおれない。

「新しい生命は次々と造り出されるが、いったん死んでしまえば
再び起き上がることはない」と悟った王羲之は、「大いなる造物主
の功業、万物すべて形は異なるもその理は一つ」であり、「道理に順っ
ておのずから泰然」として生き、そして死んでゆこうという心構え
をこの詩に見せた。人間の生死を嘆き悲しむより、今この時を楽し
むことを重視する思いは、「蘭亭の序」に記された「目を遊ばせ懐
いを馳せること」十分に楽しむ考え方と重なっている。詩の中で書

かれている宇宙の真理に対する悟りは、荘子の思想と似たよう部分
はあるようだが、序に述べられたように、「死と生を同一視するの
は虚誕であり、長寿と夭折を同じとする事が妄作である」と主張す
る王羲之は、生死を同一視する荘子と一歩距離を置いたようにも見
える。前述したように、晩年に愛する孫を亡くした時の羲之の悲し
みは非常に重いものであった。しかし、「会稽の逸民」になる前に、
王羲之は蘭亭の会で「若死も天命だと理解しよう」とした。悲しみ
を「目前の楽しみ」によって乗り越えようとする彼の思想的営為が
ここに窺えるように思われる。

「蘭亭の序」及びその詩の内容を通して、王羲之は自然に存在す
る道理を尊い、「絲竹」や「嘯歌」が無くても、「目前」を楽しみな
がら可能な限り長く生きていこうという思いを抱いていたことが分
かった。その思いから、王羲之というひとりの「人間」として生き
方を読み取ることができよう。

【注】

①王羲之の生涯については、森野繁夫『王羲之伝論』（白帝社）を

参照。

②本稿で取り上げる書翰については、唐・張彦遠輯『右軍書記』（津
逮秘書本『法書要録』所収）、清・乾隆三十四年勅輯『淳化閣帖』
（広雅書局刊『武英殿聚珍版』所収）、明・張溥輯『王右軍集』（漢
魏六朝一百三家集）所収）を用いた。

③書翰の内容については、森野繁夫・佐藤利行『増補改訂版 王羲之全書翰』（白帝社）を参照。

Wang Xizhi and Lanting Xu

Toshiyuki SATO and Liu JINPENG

[Keywords] Jin dynasty, Wang Xizhi, Gathering at Lanting, *Lanting Xu*, letters

Wang Xizhi, is traditionally referred to as the Sage of Calligraphy, and his most famous work is *Lanting Xu* (*Preface to the Poems Composed at the Orchid Pavilion*). *Lanting Xu* is highly appreciated not only for the aesthetic form of the manuscript, but also its philosophical expressions, which are considered important materials for analyzing Wang Xizhi's views on life and death. He was forced to struggle for the social position of the Wang family as its patriarch, although he used to yearn for a secluded life. This article focuses on the texts of *Lanting Xu* and some related short letters, to delineate Wang Xizhi's original philosophy of life, typified by the idea "obtaining pleasure from the present".